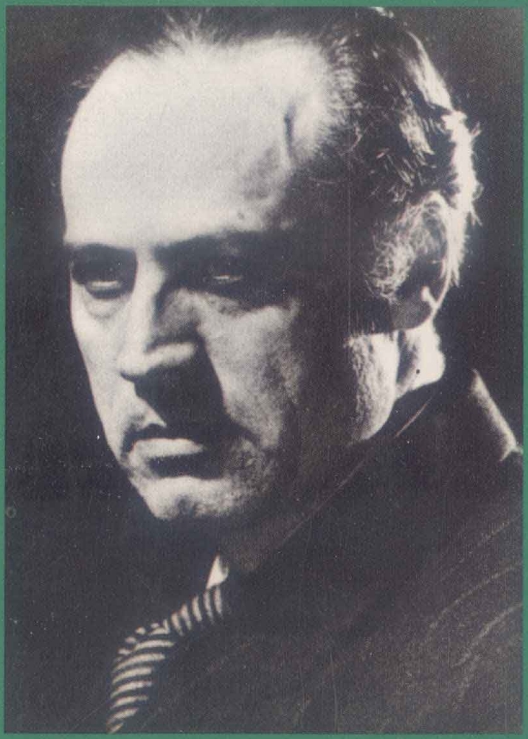
漂泊者のアリア

古川 薫



文春文庫

文春文庫

漂泊者のアリア

定価はカバーに
表示してあります

1993年5月8日　第1刷

著　者　古川　薫
発行者　新井　信
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-735709-7

文春文庫

漂泊者のアリア

古川　薫

文藝春秋

漂泊者のアリア／目次

第一章　流　離　6
第二章　ミラノの空　170
第三章　ナポリ湾の夕陽　208
解説　田辺聖子　313

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

この作品は一九八九年九月一日から一九九〇年一月三十一日まで「山口新聞」に連載したものを大幅に改稿、あくまでも事実を基にしたフィクションであり、次の諸資料を参考にさせていただきました。

『藤原義江日記』（一九二〇年三月二十二日―一九二二年一月一日）、倉本信『埋火』（倉本春吉覚書）、藤原義江『歌に生き恋に生き』（文藝春秋）、藤原義江『流転七十五年』（主婦の友社）、藤原義江『我があき子抄』（毎日新聞社）、曾田秀彦『私がカルメン＝マダム徳子の浅草オペラ』（晶文社）、牛島秀彦『藤原義江＝歌と女たちへの讃歌』（読売新聞社）、松永伍一『蝶は還らず＝プリマ・ドンナ喜波貞子を追って』（毎日新聞社）、大田黒元雄『歌劇大観』（音楽之友社）、その他関係雑誌・新聞記事など。

作者

単行本　平成2年10月文藝春秋刊

漂泊者のアリア

第一章　流離

1

御影石で十字架をかたどったネイル・ブロディー・リードの墓は、関門海峡と日本海の響灘を左右の眼下に望む丘の上にある。

一八七〇年十一月三十日に生まれ、一九二〇年一月十六日、五十歳で死んだことだけを浅く刻んだ台座の文字は、注意深く見なければ読み取れないくらい、すでに風化がはじまっている。無縁墓である。

スコットランドに生まれた彼の墓標が、東経一三〇度線が走る本州最西端下関市の一隅で海風に吹かれている。郷里のグラスゴーを出て、はるばる極東に流れてきた一人の英国人の孤独な生涯を思わせる寂寞とした墓地の風景だが、海峡をながめられる丘に骨を埋められたことを、リード自身は満足しているかもしれない。

源平合戦や明治維新の舞台として、血が流れ、砲煙が渦まいた海峡も、今は嘘のように静かだ。ゆるやかに蛇行する川幅ほどの海峡は、干満につれて日に四度、潮流の向き

を変え、海面の色はその日その時の空をうつして、さまざまに変化する。夕日が落ちて、対岸の灯が星屑のようにまたたきはじめるまでの海峡の暮色を、リードはこよなく愛した。また秋晴れの日にはコバルトブルーの急潮を押し流し、初夏の雨あがりの朝は両岸の山々までがすっぽりと濃霧につつみこまれた。行き交う巨船の霧笛に耳をかたむけながら、望郷をかみしめる彼の日々がここにあった。

生涯を独身で通したが下関の花街で知り合った女性に、子供を生ませた。その男の子は後年、オペラ歌手「藤原義江」として世界的にその名を馳せたが、親子関係は決して幸せなものではなかった。リードはその母と子を捨てたのである。

藤原義江が、建てられたばかりの父リードの墓に参ったのは、一九二〇（大正九）年三月、ヨーロッパ留学に出発する直前と、帰国後の一九二七（昭和二）年十月、九州に公演旅行の途中、下関に立ち寄ったときの二度だけであった。

二度目の墓参では、リードがそのためにも命を縮めたほどに愛飲したスコッチ・ウイスキーを十字架に振りかけてやったあと、関門連絡船、関釜連絡船の埠頭に近い山陽ホテルに泊まって父を偲んだ。ここで一緒に食事をした思い出がある。

山陽ホテルから海峡沿いに東へ一キロほど行った紅石山の中腹には、まだ紅葉館が洋風木造建築の瀟洒な姿を見せていたはずだが、義江は行ってみようとはしなかった。そこには屈辱的な記憶しかない。晩年の父とわずかな時間、親子らしい心を通わせたホテルでの語らいだけを、思い出としてのこしておきたかったのだ。

義江が紅葉館で初めてリードと会ったのは、この日から十八年さかのぼる一九〇九（明治四十二）年七月で、十一歳のときである。惨めな対面だった――。

2

姫路を過ぎたあたりから夜汽車になる。がらんとした車内を見回しているうちに心細さがつのってきた。

岡山駅で、軍服に汗をにじませた一人の兵士が、空いていた義江の横の席に坐った。上等兵の肩章を付けている。

彼は一見混血児とわかる少年に興味を抱いたらしく、早速あれこれと身の上を詮索しはじめた。

幼児のころから世間の好奇の目にさらされて育った義江に、それはさほどの苦痛を与えることではなく、適当に受け応える術も心得ていた。

「イギリス人というその父さんは下関にいるのか」

「瓜生商会の偉い人だよ」

「それはどこにあるのだ」

「下関駅から歩いて行けるところ」

「そこへ行くのか」

「いいや、父さんは紅葉館という家に住んでるからそっちに行くんだ」

義江は、ふところから皺くちゃになった紙きれを取り出して、兵士に見せた。母親が書いてくれた瓜生商会と紅葉館の所番地である。

「リードさんか。坊は何という名だ」

「水野義江」

「女みたいな名だな。いくつ？」

「十一」

「だれも付いてきてくれないのか、酷い親戚だね」

「……」

「俺は下関重砲兵連隊に帰るところじゃ」

兵士は窓を引き開けて、プラットホームの売り子から駅弁と茶を義江の分まで買い、食べるように勧めた。好人物だとわかって、義江は少しずつ心を開いていく。

夜になるともう話すこともなく、汗臭いごわごわした軍服に寄りすがって眠った。

夕刻、大阪駅発の下り列車は、翌朝下関駅に着く。そこが山陽本線の終着駅である。

「連隊に行く途中だから送ってやろうか」

一緒に改札口を出ると、兵士が、義江に言った。

「お願いします。兵隊さん」

しっかりした口調で答えたが、こくんと頭を下げるところは、やはりあどけない少年の仕種だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

駅を出ると左側に、朝日を浴びた大きな木造の洋館が見えた。
「あれが山陽ホテルじゃ」
指さして兵士が教えてくれた。
山陽本線が下関まで開通したのは、一九〇一（明治三十四）年だった。馬関駅、赤間関駅などと呼んでいたが、赤間関市が下関市と改称されてから下関駅となった。
駅舎が建設される前から付近の海岸が埋め立てられ、鉄道開通後は、駅の近くにたちまち繁華街ができあがった。
義江が今、兵士と歩いているのが、その町だ。
門司への連絡船、また関釜連絡船の基地も駅に直結されている。九州や朝鮮、大陸方面にむかう人々もすべてこの終着駅に降りるのである。
「山陽の浜というてな、俺たちは休みの日によくやってくる。夜も賑わうから遊びにきたらよい」
兵士は、商店・飲食店・料理屋・旅館などがびっしりと軒をつらねる道を歩きながら、明るい声で義江に話しかけた。ここが物心ついて初めて見る義江のふるさとだった。
「お前、どこで生まれたんじゃ」
「さあ」
義江はそれを知らない。母親が芸者をしていたとは言えないので黙っていた。十五分ばかりも歩いて、

「このあたりが西南部だが……」
兵士は通りがかりの人に尋ねて、すぐに瓜生商会をみつけた。白い二階建ての洋館だった。
「ちょっと待っちょれ」
兵士は商会に入って行き、間もなく出てきた。紅葉館の位置を尋ねたのだろう。そこから赤煉瓦の英国領事館の前を通り、しばらく歩いたところで、
「あれだ」
と、彼は小高い山の中腹に建つ白い西洋館をゆびさした。道から急な石段がほの暗い緑の中に消えている。
「これを昇るのだろう。では元気でやれよな。俺の父親は死んだ。その葬式で家に帰ったのだよ。母親はずっと前に死んでいる。それにくらべたら、お前は両親が生きているのだからな。幸せだよ」
別れぎわになって、兵士はしんみりした声で自分のことを喋った。
入口の木の扉は開いたままになっている。声をかけると白髪の男が奥から出てきて、義江を見るなり、
「ああ、あなたは若様！」
と、絶句したままぼろぼろと涙を流した。義江は当惑しながら、「これ」と、大阪を

出るとき母から渡されたリード宛の手紙を突き出した。

「大きくなられましたね。私は永年リード様につかえているコックの村田でございます。お待ちください。リード様にはすぐお会いできますよ」

彼は義江を玄関横の応接室に案内し、しばらくしてベランダにつれて行った。そこで海峡をながめながら、葉巻をくゆらしている外国人が、義江の父である。そのとき三十九歳だが、鬢のあたりにわずかな髪を覗かせるだけで、前頭部はみごとに禿げあがっている。それに黒く長い口髭をぴんとはねているのが、いかにも気難しげで、義江は恐怖に近いものを覚えながら、少し離れたところにある鋳鉄製の椅子におずおずと腰をおろした。

関門海峡を見下ろすこの丘の上に、木造バンガロー風の洋館が姿をあらわしたのは、明治の末で、そこは安徳天皇陵の西側にあたる紅石山の中腹だ。白ペンキを塗ったこの異人館は、海峡を渡る連絡船からも緑のなかにくっきりと浮かび上がって見えた。維新後、にわかに外国船の寄港がふえた港町下関の異国的な空気をひときわかきたてる風景である。

ベランダのついた回廊で七つの部屋を結んだL字型の建物が三百坪の敷地内にあり、庭の温室には日本ではまだめずらしい四季おりおりの西洋の花がいつも咲きみだれていた。「紅葉館」と日本名で呼んでいる。門柱の上を大きな楓の枝が覆っているのにちなんだ命名である。

この家は長崎に本拠をおく英国系商社ホームリンガー商会の宿舎で、N・B・リードが一人で住んでいた。彼は下関にある瓜生商会の総支配人をつとめている。

長崎のグラバー邸を思わせる屋敷のたたずまいは、そのままグラバー商会との密接なつながりを物語っている。幕末の長崎で薩摩や長州藩を相手に、武器商人として活躍したトーマス・グラバーと、明治の初めに来日したホームリンガーが設立したホームリンガー商会が、本土への進出を図って、義江が生まれる九年前の一八八九（明治二十二）年、下関に起こした日英合弁の商社が、瓜生商会である。

グラバー商会はすでに解散しており、グラバーの息子トミー（倉場富三郎）は、ホームリンガー商会に勤めている。長崎にいる彼や社員が下関にやってきたとき、この紅葉館をホテル代わりに使うが、ほとんどはリードが宿舎として使っていた。

彼はちらりと義江に一瞥をくれただけで、黙り込んでいた。

七月のこの季節には海峡に霧が湧いて、往来する船の汽笛がうるさいほどだった。そこからは紅色の花をつけた合歓の木の梢越しに、対岸門司の低い山々がほぼ水平の視界に入る。それらは遠近に従った濃淡の影を、霧の中に滲ませている。

初対面の気恥ずかしさと、ためらいがちな親しさの入り混じる妙な気分だった。身を硬くして待っていたが、いつまで経っても彼は話しかけてこなかった。息苦しい沈黙がつづいた。ぽつぽつ暑気が襲う時刻で、じっとりと背中が汗ばんできた。

「なんだ、義江君じゃないか」

突然、背広を着た中年の社員があらわれ、おどろいた声をあげた。碧(あお)い目を大きくみひらいた義江の顔を見て、すぐにそれとわかったらしい。彼は電話で呼び出されたのだろう。

「私は倉本春吉、前に一度会っているが、まだ義江君はずっと子供だったから覚えてはいないよね。しかし大きくなられたな」

彼はちょっとの間、感慨深げな視線を「混血少年」にそそいだ。自分のことを知ってくれている人がいるとわかって、張りつめていた気持が急にゆるみかけたが、初めて会う父親から無視されていることを思うと、また胸が苦しくなった。

倉本は小声でリードとやりとりしているが、英語なのでもちろん義江には彼らがどんな会話を交わしているのかは分からなかった。

「義江君、会社のほうに行きましょう」

と、倉本がささやくように言った。そのときになってリードが立ち上がり、近づいてきて、義江の肩に手をかけ、自分のほうに向き直らせて握手したが、力はこもっていなかった。

「サヨナラ」

「……」

義江は答えなかった。

石段を降りる前に、ふとベランダを振り仰ぐと、父親であるべきその人が、無表情に

義江を見下ろしていたが、視線が合いそうになると、慌てたように姿を隠した。

それから倉本について瓜生商会に行く。二階建ての社屋は、海峡の連絡船が発着する桟橋や貨物船の岸壁に近い西南部町の道路に面している。この会社のスタッフは、支配人のリードをふくめてイギリス人四名、日本側支配人・有山寅槌（とらつち）ら日本人社員十五名である。

瓜生商会は、石炭を主とする貿易のほか、船舶保険や沈船引き揚げの業務をあつかった。独立した建物を持たなかった英国領事館も一時ここにおかれた。すでに朝鮮の釜山や清国の上海に出張所を設けている。瓜生商会はいつの間にか、スコットランド系の英国資本が極東に根を張る新しい基地の様相を帯びはじめていた。

イギリス商社には二つの系列があった。ジャージン・マジソン商会を中心とするスコットランド系とデント商会に連鎖するイングランド系で、激しい競争をくりひろげていた。幕末、薩長を相手に武器を売りまくったグラバーはスコットランド系に属し、瓜生商会はその筋につながっている。

倉本は義江を事務所の隅の椅子に坐らせておいて、少しのあいだいなくなった。社員たちは、おどおどした表情のその絣（かすり）の着物を着た少年の顔立ちが、あきらかに日本人のそれではないことから、敏感に事情を察したらしくさりげない一瞥を与えるだけだ。声をかけてはいけないという雰囲気が、何となくそよいでいる感じだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton